

科学的汎神論

根本原理

ポール・ハリソン (大塚 稔訳)

Scientific Pantheism : Basic Principles

Paul Harrison (tr. Minoru OTSUKA)

歴史が未成熟な時代には、我々も子供が信じるように信じていた。しかし成人に達した現在、もうそろそろ幼稚なものは放逐すべきであろう。宇宙時代を包括するような宗教を採用すべき時代になっている。それは、自然に対する愛情を支え、地球を温存させる努力を支持するような宗教でなければならない。この宗教こそ、汎神論である。

- ・ 神的宇宙と聖なる地球
- ・ 汎神論者の宗教的实践；宗教儀礼，瞑想および神秘主義
- ・ 倫理の土台
- ・ 汎神論と環境倫理
- ・ 自然死
- ・ 死すべき者の不死性
- ・ 宗教と科学の一体性
- ・ 宗教と美的感性の一体性
- ・ なぜ伝統的宗教は来るべき二十一世紀の至福千年に適さないか。
- ・ どうして我々に宗教が必要なのか
- ・ どうすればあなた方が汎神論普及に一役買えるか。 <訳註：本稿では削除>

神的宇宙と聖なる地球

汎神論には二つの中心的な教義がある。

- 1：宇宙は神的である。
- 2：地球は神聖である。

我々がここでこの宇宙は神的と呼んだものは、各宗派の信仰者が自分たちの信じる神こそが神であると信じる確信、心情、関わりとなんら異なるところはない。しかし我々は、証明も反証もできないような目に見えない存在について、曖昧模糊とした陳述をするつもりはない。現存する宇宙と自然の大地に対する我々自身の強い心理的感情について語ろうと思う。

「あの木は美しい」というのは、木自身について何かを述べているのではなく、我々はその木に対してどうしても抱かざるをえない感情について述べている。つまりそれは、我々と木との関係についての言及なのである。

同じように、**宇宙は神的存在である**という陳述も、我々を取り巻く圧倒的な神秘と力に対する我々の感覚や感情の反応表現に他ならない。それは次のように表現できる。

我々は宇宙の一部である。我々の地球はこの宇宙から創造されたが、またいつの日かこの宇宙に再び吸収される時が来るだろう。我々は宇宙と同じ物質によって作られている。我々はこの宇宙に流刑されているのではない。まさにこの宇宙こそわが家なのである。神に直接会える場所はここであって、この場所において他にはない。我々の想像力に壁を作れば一すなわちこの実際のが家がこの世ではなく、死の彼方にある国にあると信じるなら、また神は、もっぱら古い書籍の中や古い建物、あるいは単に脳裏の中にだけ存在するものと信じるなら、この現実の生き生きした世界を、あたかもガラスを通して薄暗く輝くものと捉えることになるだろう。この宇宙が我々を創造し、保護し、破滅させるのである。宇宙は、我々の諸感覚によって捉えるには、余りにも深く古い。宇宙は、我々の言語表現で捉えるには余りにも美しく、また科学によって捉え切るにはあまりにも複雑である。我々は、謙遜と畏敬、崇拜と祝福をもって、またより深い理解を求めて一信仰者たちが信じる神には様々なものがあるので—この宇宙に関わらなければならない。

地球は聖なるものだと言うのは、信仰者たちが自分たちの教会やモスク、聖者たちの聖遺物について語る場合の関わりや畏敬と同じものである。しかし我々は、超自然的なものについて述べようとは思わない。我々の主張はこうである。

我々は自然の一部である。自然が我々を造り、死に際しては自然に再び帰って行く。我々は自然と身体の中に安らぎを見いだす。我々はまさにこの自然の懐の内に存在する。我々が我々自身のパラダイスを見出し、産み出さねばならないのは、この地球上であって、あの世の精神世界ではない。もし自然が唯一のパラダイスだとすれば、その自然からの分離は、直ちに地獄を意味することになるだろう。自然の破壊すれば、他の生きもだけでなく、人類自身にも地獄を創造することになるだろう。自然は、我々の母であり、故郷であり、安息であり、平安であり、過去であり未来である。我々は、自然の事物を、信仰者が自分たちの神社や寺院を聖なるものとして崇めるように、崇めねばならないし、その精妙かつ脆弱な美しさを保存しなければならない。

主だった宗教は、自分たちの神を種々の仕方で表現している。つまり、神秘的、畏敬的、全能、全知、超越的、無限、永遠というように。これらの表現は、単に人間の本性を反映しているのではない。伝統的な神の属性は、宇宙の真の性質に基礎づけられる（「神の真なる属性」を参照）。

有神論者が神を崇拜する場合、彼らは無意識的に宇宙を崇拜している。彼らが、神は自然の内だけでなく宇宙の内部にも現在していると信じるなら、紛れもなく彼らは、**存在**の栄光の一部を感

じ取ることになるのだろうが、それにも拘わらず、彼らは**存在**を越えた或るものにその栄光を帰そうとしている。それゆえ、彼らは、汎神論を可能にするような深い意味での自然や宇宙との接触ができなくなるのである。

しかし神は宇宙とは何の関連もないと信じる有神論者は、自分たちを實在から切り離しているのである。彼らは、自分たちの強い関心を目の前にある**真実の神**から遠ざけ、頭の中に生み出した想像上の神に注いでいるのである。それは、實在を深い霧の中に包むに等しく、信仰者を夢遊病者に変えてしまっている。

宗教儀礼、瞑想および神秘主義

汎神論者の宗教的実践は多くの目的に有効である。

- ・それは、神の實在との関係を構築する。
- ・それは、自然と宇宙に対する崇拜の念を表現する。
- ・それは、自己と自然と宇宙との密接な結びつきに関する理解を深める。
- ・それは、人間の生が自然のサイクルの一部であることを理解する手助けになる。
- ・それは、自然と宇宙が持っている美の大切さを知らしめる。
- ・それは、我々の信仰心を強める。
- ・それは、ストレスの時代に精神的な支えを与える。
- ・それは、我々の信仰に社会的な相互信頼を与える。
- ・それは、日々の精神療法を提供する。

汎神論者の儀礼は無宗教者の儀礼に似ている。我々は、我々自身と自然、我々自身とダイナミックな太陽系との力強い結びつきの瞬間を特別なものとして賛美する。我々は、毎日の日の出と日没や毎月の月の満ち欠け、夏至や春分に見られる太陽の年間周期を賛美する。空が晴れていれば、毎年見られるペルセウス座流星群や双子座の流星群の嵐をも賛美する。

また我々は、汎神論的瞑想を通して、宗教儀礼とは関わりのない**存在**との結びつきを賛美する。その神秘的経験には、全ての宗教を貫く特徴がある。その中心部には、自己超越の経験と聖なるものとの一体感が存在する。しかしこの経験はよく、成就すること、および持続することが困難だと言われる。

神秘的一体感は、汎神論の方が近づきやすい。その過程は、想像や気分によって左右されない。それは、理解が容易だし、全ての人々が論議に参加でき、何度でも反復可能である。

實在との神秘的一体感の本質は、自然や物体に対する感覚経験の意識を完全に放棄することにある。自己とは、単に實在の自己意識の乗り物にすぎない。自己は超越され、自己がその一部になるような全体と再び統合される。

それは、我々がそれから作られている物質の感動に満ちた直接的な経験、つまりその全体の礎となる経験、全体との結びつきの経験である。

それは、澄み渡った夜空一面の星や銀河の下や森の泉や風によって波立つ池の傍ら、また蠟燭の光の前でも感じ取られるし、一個の花崗岩や一枚の樺の木を手にしても感じ取られる。

それは、いつでもどのような人にも達成できる経験であって、何ら特殊な訓練は必要ない。また

非常に多くの神秘家たちが、頭の中に描いた神との「結びつき」が失われた際に感じる悲痛感や意気消沈を決して放置することはない。

倫理の土台

すべての宗教は、地獄の恐怖や天国の約束を通して、倫理体系を背後で支える働きを担っている。宗教はすべて、善良な者を、その者自身のためにではなく、報償の期待や処罰の回避に望みを抱かせながら、育てている。

汎神論は、何よりも**実在**に対する我々の関係についての主張だが、おのずと倫理や政治にも関わらざるを得ない。この倫理は、人間生活の主要な善が知識、愛、行動を通して、宇宙や自然、および他の人間たちと交わることにあるという前提の上に築かれている。この結びつきが、自分自身や他ものの中で促進されるものならどのようなものでも善であり、阻害するものは悪である。

ある種の強いいくつかの感情がこの結びつきに大きな障害になっている。とりわけ大きいのが不安である。不安には種々の原因がある。愛情の欠如や冷却から生じる情緒不安感、貧困や生活基盤の喪失から生じる経済的な不安感、病気や災害、環境の致命的な破壊や暴力から生じる肉体の不安感。原因は異なるが、抑えきれない怒りや妬みも宇宙との結びつきを不可能にさせる。

我々はこれらの感情を自分自身でコントロールする方法を見いださねばならない。その方法こそ、汎神論的瞑想や自然との接触である。これによって、我々自身の問題は一定の観点から見る事が可能となる。それは、どのような苦しみを受けても、何を失っても、決して我々から離しきれないものが一つあることを思い出させてくれる。つまり我々はいつでも途方もない大きな全体の一部であること、またそれから決して分離されないこと、そのことである。

我々はまた、他の人々に強いられる社会的政治的状态をも改善するように助力しなければならない。つまり安定した生活と社会の高揚を、貧困の絶滅、収入と労働の公平な配分、真の民主主義と実質的な参加による論争の平和的解決によって促進することに他ならない。

汎神論と環境倫理

汎神論は、環境倫理に理想的とも言える堅実な支援を与える。東洋の大抵の宗教や土着宗教は、動物に親切であること、および自然を保護することに大きな関心を払っている。

しかしパレスティナに由来する西洋の三大宗教は、環境への働きかけに対してそれほど好意的ではない。旧約聖書では、神は、大地を、アダムとイヴが使えるように授けたことになっている。これは、言うまでもなく自己破壊に至るまで自然を乱用してもよいという意味ではない。ただ人間のためにそこに置かれたただけであって、人間が自由にしていよい権利はない。ユダヤ教やイスラム教には環境問題に対する指標や知恵が含まれているが、それは信仰の中心的な教義にはなっていないし、天国に至る戒律や条件として含まれているわけでもない。

キリスト教では、環境に対する我々の義務についてはほとんどまったく触れていない。イエスもパウロも、また新約聖書に引かれている他の作者や語り手も、全く環境問題については何も述べていない。むしろ新約聖書では、神ご自身が新たな世界をつくるために大地を焼き尽くす場面が鮮明

に描かれている。

汎神論では、自然世界に対する関心が根本である。汎神論者は、自然世界を聖なるもの、神聖なる寺院と見なしている。信仰者が寺院を清潔かつ奇麗に保つためにはどんなことでもするように、汎神論者たちも、生の多様性を保持するためには、また他の人々が自然との関りを持てるようにするためには、どのようなことでもしなければならない。

我々は可能な限り種の豊かさを温存するようにしなければならない。これは、種が完全に絶滅することから守るという意味ではない—ひばりがどこかで現在も生存していると知ったところで、もしその罫りが私が住んでいる家の近くの野原で聞かれなければ、大した慰めにはならないだろう。可能な限り多くの種が、可能な限り広範囲にわたって生息できるようにしなければならない。現在生きている生き物は最大限に保存しなければならないし、減少しつつある生物は保護して増やすべく努めねばならない。また言うまでもないことだが、全地球的なエコシステムやこの惑星全体を脅威に晒すような、大気や海への汚染は中止しなければならない。これには、西欧の生活スタイル全般にわたる種々の変革—その製造方法、エネルギー、交通手段、廃棄物、税制等の変革—が必要になるだろう。

全ての人々が生活のレベルから自然を見る必要があるし、どの人々にも、たとえ僅かの部分であるにせよ、自然に対する何らかの領域には関わる権利がある。我々は、何も無い町や近隣地域に自然を創造しなければならない。

結びつきは、当然のこととして宇宙に対する関わりにも気軽に関心を持つことを要求するが、世界が都会化されるにつれ、消されることのない街燈からはじき出される光によって夜空の輝きも霞みきっている。我々は、光の公害を阻止して夜空の輝きを取り返すキャンペーンをする必要がある。そうすれば、再び満天の輝きに満ちた夜空を見ることができるようになるだろう。誰もが自由に使えるような巨大な望遠鏡を数多く作る必要がある。

自然死

死後の生に対する何らかの信仰は、人間社会ではほとんど普く行き渡った信仰である。古代の地中海世界では、死後の生は、地下にあって、半ば亡霊のような生死の曖昧な状態に無慈悲にも置かれる世界だと考えられていた。天国が現在の世界より遥かに素晴らしいものという信仰は、一般的には飢饉や伝染病ないしは戦争などが引き続いた後に生じたものであろう。

天国への信仰は、この世界を保持しようとする我々の試みには有用なものではない。天国が存在するというのなら、たとえこの地球を我々が完全に滅ぼしても、絶えず更に良い世界が我々を待ち構えてくれることになる。かりに天国のようなものが存在するにしても、地球にとっては、我々が天国を信じない方がよいことにはかわりはない。

キリスト教やイスラム教に見られるような、終末論的な世界の終焉に対する信仰は、危険である。もし神ご自身がいつの日か、イエスやモハメッド、旧約聖書の預言者たちが書いているように、天国を巻物のように巻き取り、地上に火の雨を降らせるとするなら、なぜ我々はこの世界を躍起になって温存させようとするべきなのだろうか。根本主義者の中には、我々が生み出している環境破壊が、実際には世界の終わりを目指す神ご自身の計画に沿って進められていると信じている者もいる。

我々は死を忌み嫌うべきではない。死は自然に不可欠なものである。もし死がなければ、誕生もあり得ないだろう。また種が変わり行く環境の変化に順応し続けられて行けば、異なった遺伝子の結合形態を持った個体も生まれ出るに違いない。

死は、我々が愛と誕生と幼年時代の奇跡に支払う代価である。死がなければ、度の過ぎた保護によって、これまで誰も子供を持てなかったに違いない。

死は恐れるようなものではない。生きているということは、死んでいないということ、死んでしまえば、死を意識することもない。従って問題を生んでいるのは、生と死との間の束の間の移り行きでしかない。このような束の間の瞬間の影に脅えながら全生涯を過ごしてはならない。死を恐れて生きることは、生きる屍となって生きることに他ならない。

汎神論は恐怖心から我々を自由にしてくれる。我々の身体は、自然の一部、物質の一部である。我々が全体から分離されるのは、束の間の期間である。死ねば、自然と宇宙に再び一体となり、身体は新たな生命へとリサイクルされる。まさに死に行く過程の最中には、このリサイクル過程の実現に向け心をリラックスさせるべきだろう。それは、死後に天国や地獄に行くのかどうか、あるいはゴキブリや王に転生するのかどうかに思い悩む以上に、遥かに心を和ませるであろう。

自然な埋葬方法は、汎神論者にとっては非常に大切なことである。我々は、身体がリサイクルされて植物や木々になれる森のような特別な場所に埋葬されることを望んでいる。このようなことを思っていれば、いかなる恐怖心も起こらない。自然を愛する人々には、むしろそれは慰みに満ちたものですらある。汎神論者たちは、一丸となって自然埋葬できる大地を探し出す必要があるが、その際にはもちろん他の生き物たちを害さないように気をつけねばならない。

自然埋葬の方法は、他に水葬とか、単純な棺桶での火葬や大地に灰をまくなどの方法がある。

死すべき者の不死性

多くの人々が何らかの形で死後の性を望んでいるが、我々は現実的な見方を、つまり真と思える事実に合致するものを、追求しなければならない。その事実とは、我々の精神は身体とは分離されず、従って死後には生存することもないということである。瀕死の状態から帰還した人々の証言は、その誰もが実際に死んでしまわなかった以上、事実に基づいた証拠とは言えない。にもかかわらず、我々はある種の人格の存続を一例えば我々が現実の世界に残したものと記憶を通じて一願ってやまない。

一つは、子孫。たいていの人々は、子供を残し孫を残す。彼らが遺伝子や特性を受け継いで行く。血統が現在を過去と未来に結びつけている。従って時間は、単にその世代だけで閉じた孤立系ではなく、連続したものである。血統は、最終的には共通の祖先全てにまでたどりうる結びつきを形成しており、地球上の全ての生き物も共通の種の起源にまで結びつけられている。

二つ目は、思い出。たいていの人々は、その死後にも思い出される。思い出される度合と程度は、その人が他の人々にどれほど親切にしたかに左右される。この思い出は、東洋や南アジアのように神聖なものとして祭るのが伝統になっているところもある。年に一度の死者の命日や誕生日には、子孫が彼らの遺影を取り出して、思い出に浸られている。

三つ目は、継承。故人の記憶に結びつくような貴重な品々―愛用のステッキ、スポーツ大会での

賞状、収拾された化石類一が代々受け継がれる。

四つ目は、成し遂げられたこと。ある人の善行や功績は、いくつかの場合には極めて長きにわたって、死後にも残る。成し遂げられたことの大きさに比例して、残る長さも延びて行く。

先に述べた死後の生の「現実の諸形式」は、結局は、大方の人々を満足させるような一つの形態に集約することができる。それは、より大きな親切と考慮を強く促進することになるのは明らかである。天国に対する利己的な希望というより、世界を改善し、自然を保護するための更なる努力を大いに刺激するはずである。キリスト教の神は、死の床にあってさえ破壊的な利己主義の生涯を許しているが、子孫や自然世界の裁きは、決してそのようなことを許さない。

宗教と科学との一体性

科学的汎神論においては、科学と宗教は一つである。

科学は本来、唯物論的である。それは絶えず唯物論的な説明を求めている。ある種の精神的な力が作用した—もしそれが事実なら、科学も科学技術も終焉するだろう—という説明を決して受け入れない。病気は、かつて魔力のせいだと考えられた時期もあった。科学はそれに唯物論的な説明を与え、人間にもコントロールできるようにした。磁力は以前、精神的な力によるものと思われていた。ミレトスのタレスは、磁石には精神が満ちあふれていると考えた。しかしその後、科学はそれにも唯物論的な説明を与えた。

同じように科学的汎神論も、存在するものは物質か何らかの形態のエネルギーであると信じる。どのようなものも、物質かエネルギーでない限り、存在しないし、知覚されないし、また他のものに作用を及ぼしたりできない。これは、精神的な現象や力は存在しえないという意味ではない。もしそのようなものが存在するなら、それは実際には物質的なものでなければならないという意味である。

科学的汎神論においては、科学は宗教探求の一部になっている。つまりそれは、我々がその一部であるような**実在**に対するより深い理解、また我々が住んでいる畏敬すべき宇宙に対する、また自然や環境に対する深い理解を求めている。それによって、我々は多様な自然を含んだ地球の豊かさをよりうまく保存できる。

科学的汎神論においては、認識が絶えず開かれた状態になっていることが神聖な義務となっている。実在や新しい事実に耳を傾けるだけでなく、全ての事実や他の人々の要求や感情にも耳を傾け、科学から政治や家庭生活を含むあらゆる場面で、開かれた認識を目指すのが科学的汎神論である（「科学的汎神論の科学的とはどういう意味か」を参照）。

もちろん、科学によって汎神論が裏打ちされると言うことはできない。多くの宗教が現在、誰にも反証できない種々の方法でその信仰を語っているところを見ると、それらの宗教が科学と共存することは可能だし、また現に共存しているものもある。

しかし科学的汎神論は、積極的に科学を取り込んで成長するものである。科学的な諸発見は、絶えず存在の不可思議さと神秘さ、宇宙の巨大さ、自然の複雑さを強調している。科学的な諸発見によって決してこれらが触まれることはない。存在の究極的な神秘や、それが現前する圧倒的な畏敬が絶えずそれに立ちはだかっているからであり、かつ将来にわたってもその状態が続くと思えるか

らである。

宗教と美的感性との一体性

科学的汎神論はまた、宗教と美的感性—形態の評価—および芸術の統合というもう一つの統合へと道を開く。

物理的宇宙、ないし自然の形態とそれを評価する我々の能力との間には、ある種の共鳴がある。その共鳴は、自己と世界との一体性によっている。我々は、宇宙と同じ物質によって造られており、その他の自然も同じパターンでできている。

音楽的調和は、単純な数の関係である。我々がそれを楽しめるのは、我々も原子や原子核、電子からできていて、単純な数によって関係づけられているからである。

我々が自然の諸形態に応答するのは、我々が自然の一部だからである。我々が、たとえばこのページに記されたような物質的かつ宇宙的な諸形態に反応するのは、我々がそのような物質的な宇宙の一部だからである。

美的感性は、存在の神聖さに対する感覚的、知的な応答である。宗教は、その感情的、倫理的な反応であり、科学は、その認識論的、操作的な反応である。

人間の芸術は、我々が自然のうちに見いだす素晴らしい形姿、あるいは望遠鏡や顕微鏡を使って宇宙や小宇宙に見いだす形姿、を決して凌ぐことはできない。

これを認めることが、芸術に新たな刺激と存在理由を与えることになるであろう。芸術は、この神的な宇宙と神聖なる地球とを賞賛しなければならない。

なぜ伝統的宗教は、来たるべき二十一世紀の至福千年に適さないか

私が子供の頃は、子供として話し、理解し、考えた。しかし大人になった今では子供じみた事柄は放棄してしまった（「コリント人への第1の手紙」13.11）。

我々は、現在、以前には決して意識しなかったような、広大な宇宙の領域と多種多様な途方もない種と相互に関連づけられたあらゆるレベルの事物に溢れた世界に住み、科学と科学技術に基づいた情報が目まぐるしく変化する産業化された都市に住んでいる。

しかし現代の世界を支配している主要な宗教は、迷信が盛んであった時代の農地改革を促進する人々と田舎の牧歌的な人々の間に広まったものである。その時代は、太陽な地球の周りを巡ると考えられ、星は天井にあいた穴にすぎないと考えられていた。

古代の農地改革論者に従った産業革命後の宗教には、深刻な問題がある。

一つは、彼らの倫理的規範が現代社会の異議申し立てに順応していないこと。既に指摘したように、主要な宗教にはもはや、環境支援に対する活動を支える力がなくなっている。西欧の全ての宗教の聖典は、様々のレベルで、女性の平等に進んで抵抗しようとしている人々に支持を与えている。

それらの宗教は、しばしば日常の経験や科学が我々に示す出来事ではあり得ないような事柄を信じるように強要するだけでなく、時には論理学を否定する教義すらも信じることを強いる。それら

は、我々の精神を二分するように強いる。日常の実際の生活では、狐のようにずる賢く、絶えず探しまわっては、新しいものがないかを探り、解決を求め、証拠をチェックしている。

しかし宗教生活の領域では、幼児のようにのろみである。我々は経験や科学を平然と否定するような物事—奇跡、復活、神や天使の声、天井から降り来る救済者—を信じている。実際人々の中には、ほとんどどのようなことでも信じてしまえるような者もいるようだ。

この宗教の領域は、大方の人々にとってなくては掛け替えのないほど重要であり、生活の大切な部分—誕生、成人、結婚、親子関係、死に至るまで—の大半を占めている。

しかし理性と宗教の分離は危険である。宗教は、政治や人種に関する不合理やその他諸々の拒絶を保護し、匿いながら、現実と経験的事実との立ち向かう勇気を反古にしている。我々は聖なるものの息の根を止めねばならない。そして誰にでも納得できる合理的な宗教を促進し、現実と経験的事実とに道を開かねばならない。その宗教こそ汎神論である。

どうして我々に宗教が必要なのか

我々はなぜ宗教を放棄して科学だけに頼ることができないのか。

それは、科学だけでは我々の本当の欲求を満たせないからである。

都会では孤立化が非常に進んでおり、我々には自分よりも偉大なもの—一人種や国家ほどはっきり区別できないようなもの。周囲にいるちっぽけな生き物よりもっと包括的なもの。狂乱した世界マーケットよりもっと持続性のあるもの—を信じないではいられない。

我々には、人生の価値と意味との源泉が必要なのである。科学は物事を説明するが、それらの物事に価値と意味とを与えることはできない。確かに科学者の中には、特に生命や精神について、その価値や意味を薄めて説明する者もいる。しかし人々は、単なる機械論に脱した説明や盲目的な遺伝子の奉仕者とするような説明に満足していないし、またこれらの説明も科学的に正確なものではない。

我々は、我々の道徳体系にもっと深みのある根拠を必要としている。科学は事実を処理するが、倫理は処理しない。多くの哲学者たちは、啓蒙された利己主義に基礎を置くような倫理体系を工夫しようとしてきた。しかしもし利己主義が勝を制することができるなら、無知蒙昧な利己主義が常に幅を利かせることになるだろう。

象のような動物の中には、家族の一員の死を感じ取っているように思える生き物もいるとは言え、我々自身の差し迫った死に気づいているのは、おそらく我々人間だけであろう。我々には、死に対処する方法が必要だし、少なくとも我々の一部には死を超えた生を望む希望も必要である。

我々は、伝統的な宗教が満足させようとしているこれらの深みのある要求を満足させるようないくつかの方法を探らねばならない。

しかし同時に、科学的な手法の精密さをも保持していなければならない。決して理性と証拠から逸れてはならないし、現実の経験世界を決して見失ってはならない（「科学的汎神論における科学とは何か」を参照）。まだ未熟な時代には子供が信じるように信じ、子供が考えるように考えていた。大人になった現在では、もう子供じみた考え方は放棄すべきであろう。我々が宗教に必要だと認める—自然への愛と地球を保護する努力とを十分に支持するような宇宙時代に相応しい宗教を採用

すべき時である。その宗教こそ汎神論である。もしあなたがたが自然を愛し、夜空を愛するなら、また自然の事物の全てに神聖さを認めるなら、もうあなたがたは汎神論者である。

科学的汎神論と言われる場合の科学的とはどういう意味か

森や細胞や銀河を見る有神論者たちは、目には見えない創造者によって映し出された栄光を沈思している。汎神論者たちは、覆いを剥がされた聖なるものの面を凝視している。

科学と宗教

ルネッサンス以来、科学は宗教の領域を退けてきた。

天空は、かつて星の領域の彼方に、正確には土星の軌道の外にあると考えられていた。現代の望遠鏡によって、宇宙の領域はさらに押しやられた。

しかし有神論者たちは現在では、神が可視的な対象の最後の存在領域を越えた所に存在するとは主張しない。神はもっと安全な住処—この現実世界では一片のモルタルほどの存在価値もない不可視な要塞—に移されている。しかしこのことが、逆説的なことだが、神の最善の防御になっている。というのも、そこでは、神は経験的に吟味できず、計測もされず、神の存在は結果として決して反証されなくなるからである。

この非物質的な神は、科学の攻撃からは全く無縁である。科学は、現実世界の検証可能な陳述や理論だけを構築し、反証できる。検証できないような一連の信念体系については、それを支持したり割り引いたりすることはできない。

近年フランク・ティプラーのような科学者たちは、自分たちを宗教の専門家ないし予言者だと唱え、次々になされる科学的発見が、神や真理や不滅性の真理を「証明する」と主張しだしている。彼らの科学者としての信任が、彼らに偽りの信頼を与えている。もちろん彼らには、その信念と意見とを主張する権利はあるが、科学の名の下に宗教的な信念体系などについて声高に主張する権利はない。地球上や天上のいかなるものにも、あるいは奇跡による自然法則の逸脱ですらも、非物質的なものの存在を証明することは不可能である。たとえ神が明日雲間の中から全世界にその姿を見せても、我々はなお、神が非物質的な存在であると仮定することはできないだろう。

科学的汎神論が科学的と呼ばれるのは、科学が汎神論を支持するからではなく、科学的汎神論が科学的手法を用いて**実在**を捉えるからである。科学的汎神論は、**現実**を分け進み、証拠に固執する。それは信仰よりも確かさを好み、複雑な仮説よりも単純な仮説を好み、不必要に存在を多様化することを拒否する。科学的汎神論は、科学の諸発見を受け入れると同時に、実在がしばしば一筋縄では処理できないことをも受け入れる。

信仰 対 確かさ

汎神論は、見えて、聞こえて、触れられて、味わえる自然世界と神聖なこの宇宙こそが実在だと断言する。汎神論には、神を信じる者が神の性質、つまり崇拜され祝福されるべき性質として主張するほぼ全ての性質が含まれている（「神と宇宙」を参照）。

これらの性質とは、力、神秘、畏敬、創造、偏在などである。自然と宇宙には、これらの性質が

明白かつ経験的に知られる形で保持されているが、超越的な神々には、それらが、もっぱら信仰や啓示および個人的な想像力を通してのみ保持している一存在している一と思われるだけである。この神聖な宇宙と地球については、誰もが目にしてきたが、神を目にしたのは、信仰者の中でも、ごくわずかの人間だけである。

この意味では汎神論は科学的だと言えるが、有神論は科学的方法とは相容れない仕方で機能している。ここで、信仰の中身について、つまり神に関する特定の信条や超自然的な人間の力について、語るつもりはない。これらの大半は、現時点ではテスト不可能であり、非常に多くの科学者たちも、自分たちの信念を貫くのに何の支障も感じていない。むしろ、信仰の本質について語ろうと思う。信仰とは、要するにいかなる科学者も科学においては受け入れようとしないうこと、また思慮ある人なら契約の土台として受け入れがたいような証拠をもとに、信じられず、証明もできず、非論理的でもある事柄を受け入れることに他ならない（「信仰」を参照）。

覆いをとって聖なるものの面を凝視する

現実に存在するものが聖なるものだとすれば、有神論者が神をより良く理解しようとするように、汎神論者も、絶えず予期せぬ出会いと研究を続けながら実在をより良く理解しようとするべきであろう。

汎神論者にとって、科学とは、アインシュタインのように、宗教をより深く表現しうるものである。もちろんこのことは、有神論者にとっても可能である。ケプラーは、神が様々の調和という観点からこの太陽系を設計したと信じることによって、惑星軌道の法則を理論化した。我々と有神論者との相違は次の点にある。

有神論者たちが森や細胞や銀河を見る場合には、それらが目に見えない創造者を反映した栄光を熟視していると、あるいはそれらが神の計り知れないヴェールを凝視していると感じ取っている。

汎神論者たちがそれらを見る場合には、それらがそのまま神的存在の栄光を示すものと見ている。彼らは、覆いを取って聖なるものの面を凝視しているのである。

証拠に固執して：経験主義の神聖な義務

科学的汎神論に関して言えば、経験主義はもっとも神聖かつ不可欠な義務である。証拠を無視する汎神論者や新たな証拠にまったく目を閉じるような汎神論者は、実在を拒否する罪を犯すことになる。

証拠というのは、科学と諸感覚が処理する類いの証拠のことである。

これは、感覚可能な世界を直接経験するということであって、不確かな幻覚や想像上の「経験」ではない。たとえそれらがどれほどその個人にとって強烈なものであっても。つまり他人が反復でき、検証できる経験であって、他人が近づけないような私的な経験ではない。

時に、神を信じ天国を信じている人々は、個人的な経験を「証拠」として提示される場合もあるが、彼らは、科学が受け入れられるような類いの証拠については何も語ろうとはしない。他人にはまったく反復できず、検証もできない個人的な感情や想像を語っているだけである。

科学的汎神論は、ごくありふれた日常の経験であろうが、科学的に確証されたものであろうが、全ての証拠を受け入れる。不都合な発見や常識に反する事柄、例えば量子力学のようなものなども、

それが十分に確証される限りは受け入れる。科学的汎神論は、自分たちに不都合な真理にも目を向ける（「神と実在」を参照）。

認識の開放性：絶えざる修正を神聖な義務とする

実在は絶えず変化し続けている。我々が蓄積する実在の知識も常に変化し続ける。従って実在に関する理論も同じように絶えず変化の波に晒されざるをえない。

人間は成長するにつれて、信念を固定する傾向になり、自己を補強、完結する段階に入って、変化に鈍感になる傾向がある。これは、とりわけ宗教上の観点に最も強く現れるが、政治や人種の問題についても、更には専門的な訓練を受けた学者たちの間にもそういう傾向がある。

科学的な理論ですらパラダイムを形成してドグマを産み出し、トマス・クーンが確立したような新たな手法に目を塞いでしまう傾向がある。大量の反証が蓄積されてはじめて、古いダムが破壊され、長老の教授たちが退官したり死去したりしてはじめて、新たな理論が日の目を見る始末である。

我々はこの種の傾向を、閉ざされた精神による「認識の閉塞性<cognitive rigidity>」と呼ぶ。これは、人間の個性に真っ向から対立する最も危険な性向である。その起源はおそらく生物学的なものであろう。神経細胞が結合され、それらに結びつく経験が反復されるにつれて、細胞は結束力を増し力を強める。これは、即決が要求されるような場合には、狩人たちを招集するものにとってはあるいは好都合かもしれない。しかし社会的な集団間において成り立つ政治の分野では、それは問題以外何も産み出さない。

認識の開放性とは、頑さと対照をなすものであって、それは絶えず新たな証拠に道を開く。新たな証拠を追い求めることが、認識の開放性である。たとえ自分の仮説に矛盾する証拠であっても、積極的にそれを探求するのが、認識の開放という意味である。

オッカムの剃刀：最も単純な説明を求めること

成功した科学は、証拠に矛盾せずに物事を最も単純に説明することを求めてきた。

この「経済性の原理」は、十四世紀のイギリスにあって影響力のあった哲学者ウィリアム・オッカムに因んで、オッカムの剃刀として知られている。スコラ学者たちとの論争の中で、オッカムは次の規則を適用して応戦した。

ものは必要以上に増やしてはならない

この原理は、科学の歴史に大きな実りをもたらした。惑星の後退運動を説明するために、ギリシャの天文学者プトレミーは、主軌道を起点に周円する周転円の理論を考えついたが、やがて退行する事実に合わせて何百もの周転円が必要となってしまった。

コペルニクスは、地球ではなく太陽がこの惑星の中心であると仮定した。このただ一つの仮説によって周転円に伴う「不必要なもの」の一切が一掃され、現代の天文学を産み出した。

単純性の原則は、宗教にも適用される。

これまでの宗教上の思弁はどれもすべて、神々が宇宙の存在に対する一つの説明として利用されてきた。モーゼやムハンマドが、オッカムの剃刀を適用し、神々の集う殿堂を唯一の神に集約した。

しかし唯一神論にはまだ、二つのもの、つまり神と宇宙が含まれていた。神の存在が一つの「神秘」として受け入れられる限り、それは一貫した一つの説明にはなっていない。

汎神論は、この宇宙が自己充足的であると見なし、その存在を究極的な神秘として受け入れる。汎神論はもっと単純な仮説を求めて、二つの普遍的な存在を一つのものに、二つの神秘を一つの神秘に置き換える。

汎神論は宇宙と自然が神的であるという信念である。

それは宗教と科学を一つに融合するだけでなく、人間に対する関心と自然に対する関心をも一つにする。

それは死後の生に対する最も現実的な概念を提供するだけでなく、環境倫理にも最も強固な原理を提供する。

それは、常識以外のいかなる信仰も、証拠に対する開かれた目と開かれた心以外のいかなる啓示も、また自分自身以外のいかなる権威者も必要としない宗教である。